
月の国

昴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の国

【Nコード】

N5901Q

【作者名】

昴

【あらすじ】

月を慕う国、セレーネ。

その国を放浪する一匹狼の旅人・スサムが出会ったのは、国力ともいえる“月の巫女”…。なるために都“月の宮”を目指す女性だった。

彼女の依頼は、月の巫女になるためのテストに協力すること――

灰色の旅人

わたしたちの住むこの地からずっとずっと遠く、はるか東の地に、“セレーネ”というお国がありました。

セレーネは月を慕う国。月に願い、式神を呼び、式神の力によって発展したお国です。

式神召喚術に長けた女性は、月の女神に愛された者“月の巫女”と呼ばれ、皆からそれは大切にされました。

月の巫女は一ヶ所に集められ、丁重に扱われ、その街はいつしか“月の宮”と呼ばれるようになりました。

月の宮。女神に最も近い場所として、いつしか聖地となったのです――

彼女が歩いていたのは、街道を少し外れた道だった。

外れたといっても路地を歩んでいるわけではない。馬車が通れるほどの広さはないという意味で、彼女以外にも通行人はいた。道の両脇は茂み、その向こうには森が続いていたが、今のような昼間に通る分には問題もない。

彼女は年の頃なら20前後で、柿色のストレートヘアを赤いリボンでセミポニーテールにしていた。リボンと同じ赤いマフラーや、纏うマントがクリーム色から特に変色した様子も見られないことから、旅人でないことは明らかだった。歩みを進めるために前へと足を出すたび、山吹色のブーツが見え隠れする。

その彼女はふと、歩をゆるめた。隣を歩いていた男も、それに合わせた。

「いかが致しました、浄玻璃さま」

男は道の外、茂みの広がる薄暗い木の陰に視線を向けている彼女へ尋ねた。

彼は浄玻璃と呼ばれた女性よりも20cmほど背は高いが、年は同じ頃のようなだった。朱色の髪の上に白濁色のバンドナを巻いている。マントは彼女と同じクリーム色なのだが、裾はだいぶ擦り切れていた。左の腰には、剣の収まった黒い鞘が見られた。

「今、あちらで何か動いたような気が…」

左側の茂みを指して浄玻璃が言いかけたとき、再びそこが動いた。

浄玻璃は、動物でもいるのかしら、と近づこうとする。お供と思われる男はそんな彼女を制すると、腰の剣に右手をかけ、空いた方の手で茂みを掻き分ける。

「・・・」

「…手？」

そこに現れたのは、人の右手。どうやら本体は茂みの奥にあるようだ。黒い綿製のシャツの袖から伸びたその手首まで、白いサラシが巻かれている。この低い気温のせいだろう、指の第一関節まで、指先は赤くなっていた。

予想外すぎたのか、男はその体勢のまま動けずにいた。そんなお供より肝が据わっているのか、浄玻璃は動揺した様子も見せず、手頃な木の枝を拾うと、それで現れた手をつつきだした。

びく、と手が動く。死んではいないらしい。引つ張り出せと口を開く浄玻璃の声より早く反応を示したのは、茂みから出てきた手の本体だった。

「っだあああ寒ううう！！」

ガサ——ッ！と盛大な音と共に、茶色い人影が現れた。

それはマントとフードにマフラーで全身をすっぽり覆った青年だった。マントの下で、必死に両腕をさすっている。

「寒！オレが寝てる間に何があった！？ホントに寒っ！！」

あまりのことに、浄玻璃たちだけでなく他の通行人までもが足を止

めて固まっていた。

「…ここ2日で、確かにぐつと気温は下がりましたが…いつからそこにいらしたんですか？」

やはり肝が据わっているようだ。浄玻璃は誰より早く硬直から脱出し、口を開いた。

「ええと、腹減って動けなくなったのが多分、3日くらい前…」

言いかけて、茶色いマントの青年はやっと自分の周りに気づいたらしい。浄玻璃とお供の男を、灰色の瞳で見つめた。

フードから見える髪は灰色で、口元はマフラーに隠れているが、顔つきからだいたい十代後半だろうということは判断できる。マントからは黒いシャツと、両腕に巻くサラシが見えた。背はやたらと高く、浄玻璃は彼を完全に見上げていた。

マントの青年は何度か浄玻璃とお供の男を交互にみた後、

「ええと…どちらさま？」

申し訳なさそうに、尋ねてきた。

「わたしは浄玻璃。彼は護衛のアキラです」

浄玻璃はお供の男を指し、茶色いマントの青年は「どうも」と頭を下げた。

とりあえず、ということとで日の当たる 茂みの切れ目のスペースに敷物をしき、3人はそれぞれ昼食を広げていた。といってもマントの青年はどうやら腹をすかせて倒れていたようで、手持ちの食糧はなく、ふたりに恵んでもらった形なのだが。

「オレはスサム。見ての通り、旅の一匹狼だよ。東南の方から来たんだ。雪ってやつを見たくて、北に来たんだけど…」

予想外の寒さと空腹で、倒れこんでしまったらしい。マントの青年

はそこまで告げて、明後日の方を向いてくしゃみをした。

「薄着すぎるんだよ。もっと着込んだ方がいい。これからもっと寒くなるぞ」

アキラは湯気の立つ茶をスサムに勧める。スサムは礼を告げてからそれを受け取り、

「面目ないっす」

素直に頷いた。

「ところでスサムくん」

浄玻璃の呼びかけに、スサムの手が止まる。そして、

「スサム、でいいよ」

「あら、それでは呼び捨てになっちゃおうわ」

「それでいい。君付けは…落ち着かないから」

やっと、茶に口をつけた。浄玻璃は頷くと、

「分かったわ。ではスサム、腰の剣のことを聞いていいかしら」

するとスサムの灰色の瞳が、浄玻璃の視線とぶつかった。

「…よく気がついたな」

「座るときの動きでね。マントで隠れているけれど、腰の後ろにあるでしょう」

スサムは答える代わりに両手をマントの中に入ると、2本の太刀を鞘ごと引き抜いた。長さの違うそれらを揃えると、自分の右側に置いた。

「初対面で刃物なんか見せたら警戒されるかな、と思って黙ってたんだけどな。気づいてたなら謝るよ」

「いいえ、座るのに邪魔そうだと思ったただけなもの。気にしてないわ」

動じた様子も見せず、浄玻璃は微笑んだ。

「で、ね。本題はそのことではないの。どうやら2本も剣を持っている様子からすると、腕に自信はあるのでしょうか」

「浄玻璃さま！」

彼女が何を言わんとしているのか察したらしいアキラが、慌てて口

を挟んだ。

「いいじゃない、アキラ。あなただって、ひとりでは荷が重いことだってあるでしょう」

浄玻璃に諭されるかたちで、アキラは口をつぐんだ。それを見てから浄玻璃は、改めてスサムへ向き直った。

「実はね、今でこそ護衛はアキラだけだけれど、もともとはふたりいたの。けれど前の街で怪我をしまつて」

先を急ぐため、彼を置いてここまで来たらしい。

「とはいっても、護衛がふたりつていうのはわたしの目的上でも必要なことだし、アキラひとりに全てを負わせるのも酷でしょう」

だから、と浄玻璃は身を乗り出した。

「だからスサム、急ぎの旅でないなら一緒に来てほしいの。目的地はそう遠い所ではないわ。到着後にもお願いしたいことがあるから合わせて10日つてところね。引き受けてもらえないかしら？」

身を乗り出してきた浄玻璃と合わせていた視線を外し、スサムは左の頬を搔く。

別に、断る理由はなかった。護衛関連の仕事は、今回が初めてなことでもない。よく行き倒れていたやつを使うな、と思わないことはないが、伏せていたところを拾ってもらった礼もある。ちら、とアキラに視線を移してみせた。アキラはそれに気づくと、

「言つとくけど浄玻璃さま、けっこうワガママだから。苦労することもあると思うよ？」

アキラの発言に、浄玻璃はムツと頬を膨らませた。スサムはあつさり頷き、

「幼なじみが究極のワガママだったから、その点は慣れてるけど……オレみたいな通りすがりでいいわけ？ 見たところ、そこそこ身分もいい人だろ？ 浄玻璃さん」

彼女の身のこなしや、彼女に対するアキラの態度から、それはすぐに気づかされることだった。浄玻璃は微笑むと、

「いいわ。万が一やましいことがあると分かつたら、即効その場で

契約解除。だから依頼料は全額後払い。それでどう？」

「まあ、浄玻璃さんとアキラさんがそれでいいなら、オレは構わないけど。…で、目的地はどこ？」

「引き受けてくれるなら教えるわ」

浄玻璃の返しにスサムは頬を掻き、分かった、と頷いた。浄玻璃は満足そうに微笑むと、乗り出していた身を一度ひいた。

「…わたしの目的はひとつ、その街へ行くこと。正確には、そこへ行つて力を認めてもらうことなの。そのためには、試練と呼ばれるテストを受けなければならぬわ。そしてそのテストを受けるためには、護衛がふたり必要なの」

だから10日と期間を限定したらしい。

「その場所というのはね…」

もったいぶって話す浄玻璃を尻目に、スサムはお茶に口をつけた。聞いていないわけではない。ただ、こんな話し方をする幼なじみがいるせいで、態度がゾンザイになってしまっただけのようだ。

しかしその余裕は、浄玻璃の次の言葉で吹っ飛ぶことになる。

「その場所は、“月の宮”よ」

「バツ！！」と、スサムの口からお茶が噴出された。

月の宮――

それはこの国、セレーネの首都。しかしその都は、“月の巫女”と呼ばれる者とその関係者しか、居住も出入りも許されていない都である。

セレーネは、式神の召喚術で栄えた国だ。ゆえに、式神召喚に長けた巫女が“月の巫女”と呼ばれている。つまり「月の宮へ行く」ということは――

「えっ…浄玻璃さんってまさか…っ、“月の巫女”！？」

「に、なるためのテストを受けに行くのです」

動揺しまくってせき込みながら尋ねたスサムに、浄玻璃は微笑んだ。

「でも、錫杖も持っていないしっ……」

けれど浄玻璃は、錫杖？ と首をかしげる。

「スサムが以前、どんな巫女と会ったのかは知らないけど……術に使う道具は、人によって違うんだよ」

助け舟を出したのは、アキラだった。

「確かに錫杖は扱いやすいから、使う巫女は多い。それ以外にも笛だったり、弓だったり、時計だったりもする。要は力の集中が出来ればいいんだから、道具は巫女によりけりだ」

「そうなんだ……知らなかった」

スサムは頭を掻いた。そして浄玻璃が持っている長い包みを指し、

「じゃ、浄玻璃さんがずっと持つてるそれが術に使う道具？」

「ええ。といつてもこれを使うのは、術だけではないけれど。ま、そのうち見せてあげるわ」

浄玻璃は、ぽん、と両手を打ってスサムへ微笑んだ。

「ともあれ、よろしくお願いするわね、スサム」

「……うっ……」

もちろん唸ったところで、今更「嫌だ」と言える権利など、スサムにはなかった。

月琴の巫女

「スサム、スサム」

寝ぼけ眼で朝食のパンを頬張っていたスサムは、アキラの声で意識を取り戻した。

「あー、アキラさん」

「いつまで食ってんだよ。まったく、夜更かししてるから朝起きられないんだぞ。今も食べながら寝てただろ」

「…面目ないっす」

スサムは残りのパンを口に入れ、牛乳を一気に飲み干して、手を合わせた。ごちそうさま、ということらしい。それからアキラへ顔を上げ、

「浄玻璃さんは？」

「とつくにチエックアウト済ませて…あ、始まる」

何を、と言いかけて、スサムはその音に口をつぐんだ。

ふたりがいるのは、2階は宿、1階は食堂になっているごく一般的なつくりの宿屋である。正面を出れば大通りに通じている。スサムはアキラに続いて、その扉から外へ出ると、すぐ前の噴水に人だかりが出来ていた。その中心にいるのは、マントを外し、白いスカートに履き替えた浄玻璃だった。

その手にあるのは、スサムには見慣れぬ弦楽器。雫のような形をしていて、平たくした胴には4本の弦が張られている。浄玻璃はそれを抱えるように持ち、右手のバチで弦を弾いて曲を奏でていた。

浄玻璃の左手がすべるように動き、弦を止める。それにあわせ、右手の弾く弦の音が変わる。その様子はいつものちゃっかりした女性性のイメージはなく、“月の巫女”にふさわしい幻想的な雰囲気醸し出していた。

「綺麗だろう、浄玻璃さま」

アキラの声で、スサムは現実に取り戻された。

「演奏している間だけは」

しかしおそらく本音であろう一言が、ぼそりと付け加えられていた。スサムは聞かなかったことにして、

「いつも持っていたのって、あの楽器？」

浄玻璃は常に、長い包みを大事そうに持ち歩いていた。これだけはアキラに預けっぱなしにはせず、必ず彼女自身の手にあつた。しかしスサムはその包みの中身を見たことはなかったのだ。

アキラは視線だけ浄玻璃に向けたまま、頷いた。

「ああ。『月琴』といって、彼女の特技だよ。たまに、月の巫女にさせるのが勿体無くなってしまうね」

スサムは音楽に疎いほうだが、アキラの言い分には頷けた。特に興味を持たない人間までも、夢中にさせてしまうのだ。それだけ魅力があるということだろう。

弦を弾く音が余韻を残し、曲が止まる。その余韻が消える頃、やっと浄玻璃は構えをといて立ち上がり、何重にも輪となっている人々へ一礼した。

「どう、美しかったでしょう」

得意げにスサムの元へ戻ってきた浄玻璃の言葉に、自分で言うんだ、と喉元まで出掛かったセリフをかううじてスサムは飲み込んだ。

「相変わらずお上手ですね、浄玻璃さま」

「当然でしょう、これで食べているんだもの」

アキラと浄玻璃のやりとりに、スサムは首をかしげる。

「これで食ってる？」

「わたしの故郷は、貧しい村でね。巫女の仕事だけじゃ生きていけなかったの。だからたまに出稼ぎして、月琴の演奏料を頂いて稼いだのよ」

もしかして、という顔で見ると、アキラは大きく頷いた。スサムの予想通り、先ほどの演奏で数日分の旅費を得てきたのである。

「浄玻璃さんってさ…何で月の巫女になりたいの」

もういつそ月琴奏者で食べていけばいいじゃないか、という思いを暗にこめ、サムは尋ねた。

「さあ、どうしてかしら」

しかし浄玻璃はにこにこしているだけで、質問に答えることはない。代わりにとアキラへ視線の先を変えても、苦笑いで肩をすくめるだけだった。

試練の巻物

月の宮は、セレーネの都である。

けれどそこは限られた空間であり、入ることを許される者の範囲も狭く、聳え立つ塀がどこまでも続いている。その塀は、平均より高身長のスサムでさえも首を限界まで曲げて、見上げるほどだった。「ここが、月の宮です」

珍しそうに塀を見上げるスサムと、物鬱げに正面の重々しい門を睨む浄玻璃に、アキラは告げた。

「へー…思ってたのと違うな」

「そうね。まるで監獄だわ」

ぼそ、と呟く浄玻璃を、スサムは驚いた顔で振り向いた。浄玻璃はというと、さつさと門に向かって歩き出す。

「どうしたスサム、行くぞ」

スタスタ歩いてゆく浄玻璃を啞然と見つめていたスサムは、アキラに呼ばれて我に返った。

「なあ、アキラさん。オレ…まだ浄玻璃さんがよく分からない」

「奇遇だな。俺も同意見だ」

アキラは大きく頷くと、スサムをうながして浄玻璃の後に続いた。

「よく来ました、浄玻璃」

中に入って案内されたのは、大きな広間だった。何も飾られていない真っ白な壁に、高い位置にある大きな窓から差し込む陽の光が光源だ。その中で、白と赤の巫女衣装に身を包んだ老女が、両脇に若い巫女を従えて待っていた。

彼女が月の巫女の中でも大御所となる「八乙女さま」だと、アキラがこっそり教えてくれた。

八乙女さまは、浄玻璃の次にスサムとアキラへ交互に視線を送る。思わず、スサムの背筋が伸びた。

「その者たちが、あなたのお供ですか」

ちゃんとふたりいるようですね、と八乙女さまは呟いて、袂へ右手を忍ばせた。

「さっそくですが、3人には、浄玻璃が月の巫女としてふさわしいか試練を受けて頂きます」

言いながら取り出したのは、1本の巻物だった。浄玻璃は前に出て、恭しく受け取った。

「お供ふたりの力を借りて、この試練を乗り越えたならば、あなたを月の巫女として認めましょう」

月の宮の門をくぐって外へ出た途端、スサムが崩れるように膝をついた。

「ど、どうしたスサム!？」

慌てたのはアキラである。しかしスサムはらしくもなく弱弱い声で、

「ああ…疲れた…」

呟いた。どうやら、宮中の雰囲気、精神面がついていけなかったようである。

「何だよ…驚かせるなって。案外メンタル弱いんだな」

アキラの言葉に、うるさいなあ、とスサムはふくれっ面を向けた。

そして、気を取り直したように立ち上がると浄玻璃へ、

「それより浄玻璃さん。さっきもらった巻物、あれ、何だったの」

「試練のルールと地図よ」

浄玻璃はきよろきよろと辺りを見回し、適当に平らな門の横のスペースを見つけると、そこに巻物を広げて見せた。

広げた巻物は、浄玻璃が両手をいつぱいに広げて少したるむくらい。このへん一帯の地図と、試練の内容が書かれている。

「では、作戦会議といきましょうか」

スサムは浄玻璃の横に、アキラは巻物を挟んで浄玻璃の正面に、それぞれしゃがんだ。

巻物は浄玻璃とスサムが見やすいように向けられていて、月の宮を南東に、山や洞窟までの道筋が描かれている。北西に位置するところには方位記号と、試練の内容や注意事項が文字で書かれていた。アキラはその部分を指し、

「試練の内容を簡潔に言えば、洞窟の奥に祀られている“月の神殿”で自分の神具を清めてくることです。その洞窟が……」

アキラは指を滑らせ、地図の中央に描かれている洞窟で動きを止めた。「試練の洞窟」と書かれている。

「ここです。そして、“月の神殿”は……」

アキラは、北東の位置に取り上げられている“試練の洞窟”内部の詳細を入口から指を滑らせ、一番奥にある祠の絵をトントンと人差し指で軽く叩いた。

「ここ。ただし見ての通り洞窟内は基本的に1本道ですが、トラップがいくつも仕掛けられています。トラップを解く知能、道を進んで行く度胸、トラブルを回避する運の強さが問われるのが、この試練になります」

アキラは地図上から手をどけて、浄玻璃とスサムを交互に見た。

「道中は特に宮が仕掛けたものではありませんが、洞窟内はトラップや魔物が多く仕掛けられています。すぐさま命に関わるようなものはありませんが、多少の危険は覚悟して下さいね。もしリタイヤする場合、申し出て下さい」

スサムは違和感に、浄玻璃は同意の意思表示に、それぞれ地図から顔を上げてアキラを見た。アキラはふたりに微笑むと、

「審判は私、“月の宮の剣士”アキラが行います」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5901q/>

月の国

2011年10月7日02時27分発行